

校内 SNS ツールの導入とその効果についての考察

田辺由美子（聖徳学園中学・高等学校）

概要：本校では、校内の迅速な情報共有の促進や、生徒のコミュニケーション能力の育成及び情報リテラシーの実践教育の一環として、SNS ツール「Talknote」を導入した。導入して1年半が経過し、今年度は保護者への連絡手段としての運用も開始した。生徒および教員へのアンケートの結果、導入前より、情報の発信や共有、確認が容易になっていることが分かった。また、使用頻度が高いほど、重要な情報のやり取りが多いと答えた割合が多いことが分かった。

キーワード：SNS、情報共有、コミュニケーション能力の育成、情報リテラシーの育成

1 はじめに

スマートフォンやタブレット端末が普及し、SNSによって瞬時に外の世界へ容易に情報発信ができるようになった現在、コミュニケーション能力や情報リテラシーの育成が社会や保護者から求められている。また、情報伝達が容易になるにつれて、教員間や保護者への情報伝達・情報共有に即時性が求められてきている。このような社会的背景や保護者からの要請、本校の課題を踏まえ、本校では生徒を含めた学校全体で利用するコミュニケーションツールを導入した。今回は、導入して1年半が経過したので、その利用状況や、更なる活性化に向けた課題について検討を行った。

2 導入ツールの選定と導入過程

導入にあたっては、次の項目を重視した。

- 内容がシンプルなものであること
- 既読・未読のメンバーが分かること
- 投稿に対してコメントができること
- 校内の管理者がログを確認できること

本校では、以上の条件を全て満たしている「Talknote」（トークノート株式会社）を導入した。

メッセージングアプリの利用経験のない教員が多かったため、研修として2016年1月～3月

までの間、教員間での利用を行い、2016年度から生徒も含めた運用を開始した。2017年度からは保護者（閲覧権限のみ）にも登録をお願いし、現在では学校からの主な情報発信は全てTalknoteにて行われている。

3 利用状況

（1）教員間での利用

全体への連絡事項をはじめ、保健室の来室状況、各教科や分掌、事務からの連絡も含め、73のグループが作られていた。以前は校内の連絡をメールで行っていたが、現在は教員個人間の連絡も含め、ほぼ全てTalknoteで行っている。

（2）生徒間での利用

生徒のみのグループは存在せず、生徒個人間のメッセージのやりとりはできない。必ず教員が1名以上含まれているグループでのみ投稿やコメントの返信ができる。学校全体のグループでは教員からの連絡を確認するだけだが、生徒が所属している学年、クラス、部活動などの小さなグループでは発言などが行われている。

（3）保護者を含めた利用

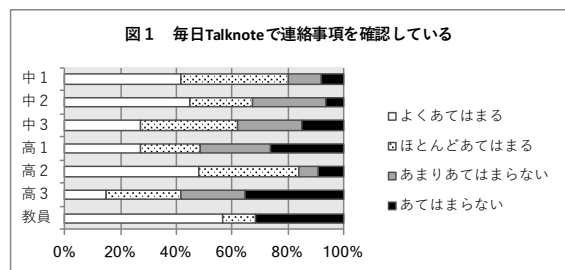
保護者のアカウントではメッセージの送信や投稿、返信ができない。教員からは学校やクラスからのお知らせや、校外学習での活動状況、集合・解散の連絡を送信している。

4 調査対象および調査時期

1学期の終業式の日全校生徒を対象に、どのようにTalknoteを利用しているかを知るためのアンケート調査（マークシート）を行った。尚、本校では現在、中学生のみタブレット端末を導入しているため、中学生は各自のタブレット端末からのアクセスが主であるが、高校生は各自のスマートフォンやPCからの利用である。また、同時期に全教職員対象のwebアンケート調査も行った。教員は学校支給のPC及びタブレット端末の他、個人所有のスマートフォンやPCでもTalknoteを利用できる。

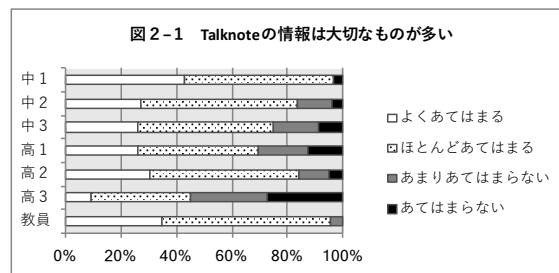
5 結果と考察

使用頻度に関する質問の結果は図1の通りであった。教員のアンケートでは、全員がよくあてはまる、もしくは、ほとんどあてはまると回答していた。しかし、このアンケートに関するTalknoteでの連絡が未読、もしくは、システム上既読だが未回答の教員が29名いたため、その数も集計結果に反映させた。



使用頻度に関して、タブレット端末を所持している中学生の回答は、高校生と比べて肯定的なものが多かった。中学では、中学3年生の活用度が低い。この学年はTalknote導入前にタブレット端末を使い始めたため、別のアプリケーションを利用している教員・生徒が多いからだと考察できる。高校では、高校2年生の活用度が高い。この学年は毎日の連絡事項の伝達で使っていることが理由だと思われる。

伝達される情報の重要度に関する質問の結果は図2-1の通りであった。図1の結果と傾向が似ているので、図1の質問で毎日確認する・ほぼ毎日確認する、と回答した生徒と、そうで



ない生徒に分けて集計を行うと、図2-2のようになった。使用頻度の高い生徒ほど、伝達・共有される情報が重要だと捉えていることがわかる。また、アンケートに回答した教員にも同様の傾向が見られた。

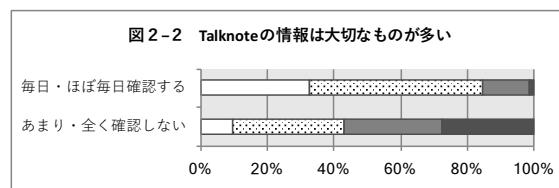
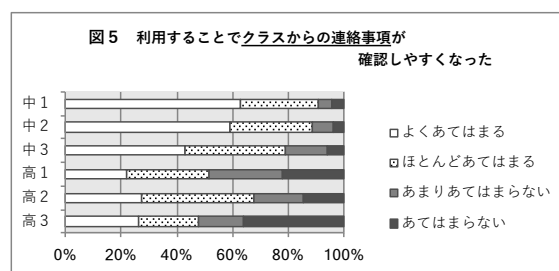
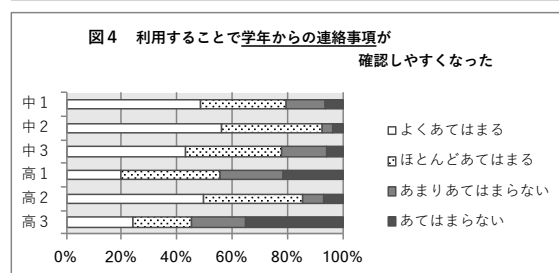
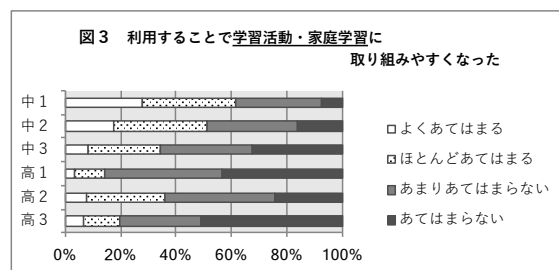
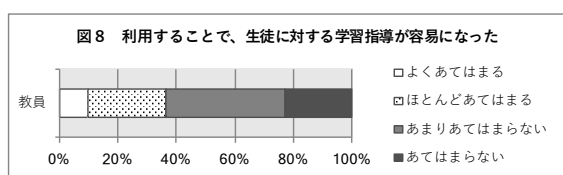
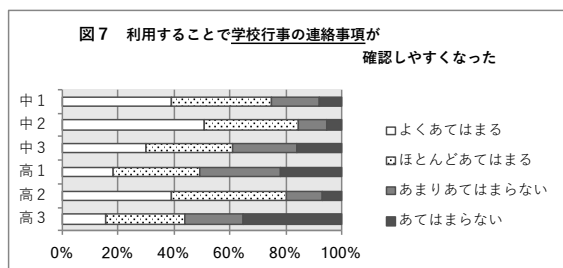
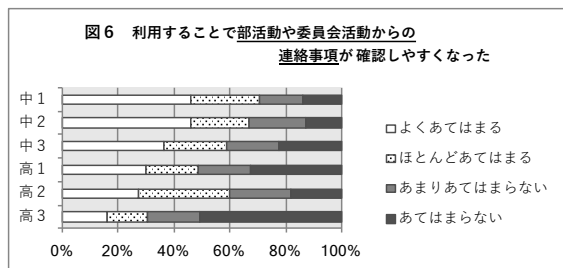


図3～7は、どのような用途で有効に活用されているかを質問した結果である。学習活動に関する活用度は著しく低い(図3)。図8は学習指導が容易になったかを教員に質問した結果であるが、同様の傾向があり、授業での利用や、宿題の通知ツールとしての活用がされていないことが分かった。





どの学年でも活用度が高いのは、学年からの連絡であった(図4)。大人数に対して一度に連絡することができるので、有効に活用できている。クラスの連絡は、中学生ではよく活用されていることが分かった(図5)。中学生は全員がタブレット端末を所持しているため、伝達ツールとして使いやすいためと考えられる。タブレット端末を所持していない高校生では、全体的に活用度が低い。活用度の高い高校2年生では教員が生徒に対してほぼ毎日Talknoteで積極的に情報を発信・共有しているため、使用頻度の高さがクラスでの活用に繋がっていると考えられる。

部活動や委員会での活用は、ある程度されているようだった(図6)。学年を越えた集団であるため、以前から生徒が別のSNSを活用して連絡を取り合っており、現在も移行が進んでいない団体もあるようだった。また、所属団体の活動頻度も関係していると考えられる。

学校行事の連絡は、図4・5とほぼ同様の結果となった(図7)。学校行事でも学年やクラスごとに活動する機会が多いからだと考察できる。

図9は、教員アンケートで、各項目に対して、情報の伝達・共有が容易になったかを質問した

結果である。アンケートに回答したTalknoteの使用頻度が高い教員は、全体的にうまく活用しており、情報の伝達・共有に関して、以前より効率化されていることが分かった。クラスでの情報伝達・共有に関する項目で肯定的な回答の割合が少ないが、毎日直接顔を合わせ、SHRを利用して連絡をする時間もあるため、特に便利になったと感じていないからだと考えられる。

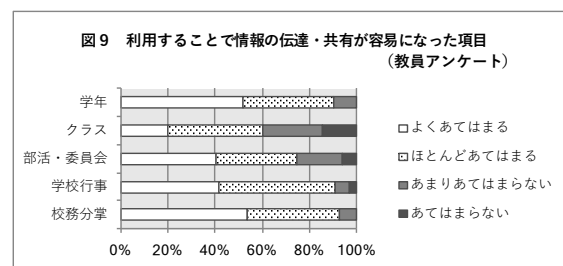


図10は情報の発信について、図11は発信された情報に対するリアクションについて質問した結果である。情報の発信に関しては、生徒と教員で大きな違いが出た。学校生活における連絡は教員側から発信されることが多いため、生徒にとって、発信よりも受信することが多い受動的なSNSとして使われているようだ。また、生徒は、投稿に対するリアクションも少ない。理由としては、教員から投稿される内容が返信を求めるようなものが少ないこと、生徒が他の生徒の目を気にしていることなどが考えられる。

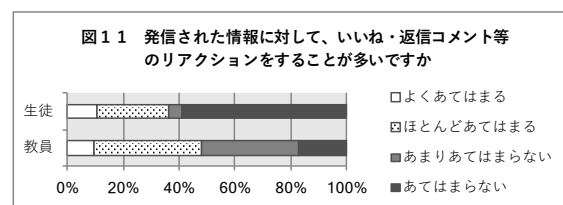
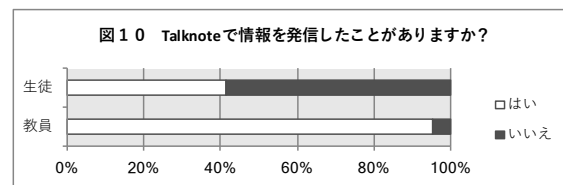
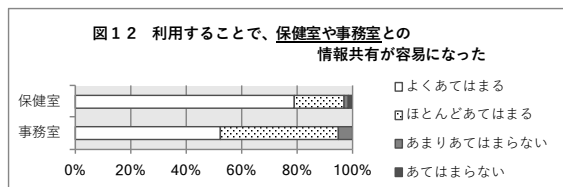
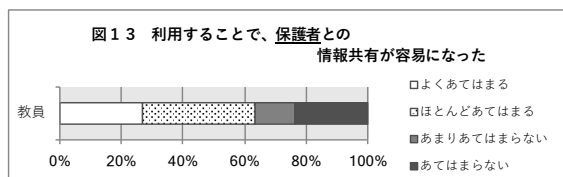


図12は保健室や事務室との情報共有に関する教員アンケートの結果である。どちらの結果も情報共有が非常に容易になったと感じている教員がほとんどであった。教員と保健室または事務室との連絡は主に内線電話を使用していた。しかし、教員が職員室にいないことも多く、情



報を伝達するのに時間がかかるのが課題であった。Talknote 導入後は、保健室からの連絡は、生徒が来室した時に、養護教諭に来室状況（時間・症状・保健室での対応など）を投稿してもらうことで、担任や授業担当者など複数の教員間で即座に情報が共有できるようになった。また、事務室からは、以前は外線電話の伝言事項など、机上にメモとして置いてもらっていた内容を、メッセージとして送信してもらっている。これはどの投稿にも言えることだが、メールと違って未読・既読を確認することができるので、既読で双方向性が生まれ、急ぎの場合は見なければ別の対応を取ることができるのは大きな利点である。

保護者との情報共有に関する教員アンケートの結果は図13の通りであった。保護者アカウントを作成して3ヶ月が経過した時点での調査であったが、他の結果と比べて、情報共有が容易になったと答えた教員の割合が少ない。保護者は教員からの投稿に対してコメントできないので、教員が学校からのお知らせや学級通信を配信する形で運用しているが、プリントを各家庭に配布していた時と大きな差を感じていない教員が多いからだと考えられる。



アンケートの最後に、導入してよかった点・面倒だった点を自由記述式で記入してもらったところ、生徒・教員共に、連絡の忘れの補完に利便性を感じている回答が多かった。また、生徒・教員共に、よかった点・面倒だった点の両方の回答に多かったのが、どんな時間やどんな場所でも連絡できる（連絡が来る）、というものだった。SNSの利点であるが、発信される時間

や情報の重要度によっては欠点に感じる場合もあると推測できる。

6 結論

導入から1年半が経過し、大きな問題もなく、順調に使用されていることが分かった。

Talknote を導入したことにより、学校に関する様々な情報の発信及び共有が容易になった。生徒・教員共に、使用頻度が高いほど、重要な情報のやり取りが多いと答えた割合も多いことが分かった。また、タブレットを所持している学年の方が、使用頻度が高かった。3年後には全校生徒がタブレット端末を所持する環境が整う計画なので、学校全体として、さらなる活用が期待できる。

教員間では、保健室や事務室との情報共有に非常に有効に活用されていることが分かった。保護者との情報共有に関しては、導入3ヶ月時点では利便性を感じる教員の割合が他の項目より少なかった。

7 今後の課題

生徒にとって最大のリスクは、情報リテラシーの実践教育を受けずに社会に出ることである。在学中に体験する機会、つまり使用頻度を高めるためには、むやみに情報を発信する回数を増やすのではなく、受け取る側にとって重要な情報を発信していくことが必要である。また、生徒が積極的に情報を発信していくような授業の課題を設定するなど、使う機会を増やす工夫をしていきたい。しかし、SNSは非常に便利であるが、コミュニケーションツールの一つに過ぎず、万能ではない。直接顔を合わせたコミュニケーションの大切さも改めて意識させることも重要である。

また、現在は生徒間で直接メッセージをやり取りすることや、保護者が投稿に対してコメントすることを制限しているが、今後は利用範囲を広げていく必要があるのかも検討していく。